

2025年度 駿台懇話会

第31回連合駿台会学術賞・連合駿台会学術奨励賞受賞者は下記の通り決定いたしました。

1.連合駿台会学術賞

【社会科学】

奈良沙織（商学部専任教授）

『業績予想の実証分析

—企業行動とアナリストを中心に』

【人文科学】

廣部泉（政治経済学部専任教授）

『人種差別撤廃提案とパリ講和会議』

2.連合駿台会学術奨励賞

【自然科学】

金子賢太郎（農学部専任准教授）

「視床下部を標的とした新しい肥満や

糖尿病の栄養治療戦略に関する研究」

〈駿台懇話会 式次第〉

日時：2026年1月28日（水）

午後5時30分（受付開始午後5時）

場所：明治大学アカデミーコモン2階

ビクトリーフロア眺の鐘

進行：明治大学研究推進部長 河野 理

第1部 学術賞受賞記念講演会

（午後5時30分）

1 挨拶 連合駿台会会長 田村 駿

2 選考報告 明治大学研究担当副学長
中別府 修

3 講演 政治経済学部専任教授
廣部 泉

「人種差別撤廃提案とその今日的意味」

第2部 学術賞・学術奨励賞授賞式

（午後6時15分）

1 挨拶ならびに表彰状授与

明治大学長 上野正雄

2 記念品授与 連合駿台会会長 田村 駿

3 受賞者挨拶

社会科学分野 商学部専任教授 奈良沙織

人文科学分野 政治経済学部専任教授 廣部 泉

自然科学分野 農学部専任准教授 金子賢太郎

第3部 懇親会

（午後6時45分）

1 大学メンバー紹介

2 挨拶 学校法人明治大学理事長 柳谷 孝

3 乾杯 学校法人明治大学学務担当常勤理事

小西徳應

4 閉会の辞 連合駿台会副会長 木村健一

（敬称略）



連合駿台会報

No.377 令和8年3月20日発行
発行・編集 連合駿台会
発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052 千代田区神田小川町三十二
明治大学「紫紺館」内
電話（〇三）三二九六―四七四七
印刷 有限会社 美創



（左から）柳谷理事長、金子准教授、廣部教授、田村会長、奈良教授、上野学長

連合駿台会学術賞 学術奨励賞を授与

新春の駿台懇話会（一月例会）

令和八年最初の連合駿台会例会（駿台懇話会）を、一月二十八日（水）十七時半より、明治大学アカデミーコモン二階「ビクトリーフロア眺の鐘」で開催しました。

田村会長の挨拶に続いて、学術賞および学術奨励賞のお名前と選考経過が発表されました。そして学術賞受賞者の廣部泉先生（政治経済学部専任教授）の受賞記念講演がありました。

講演の要旨は以下の通りです。

＊

「人種差別撤廃提案と

こんにちまで

その今日的意味」

ただいまご紹介にあずかりました政治経済学部の廣部でございます。このたびは権威ある連合駿台会学術賞を賜り身に余る光栄と存じております。

私が研究のテーマとして選びました、人種差別撤廃提案ですが、これは日本全権が一九一九年のパリ講和会議で提出したものです。この提案ですが、高校の日本史の教科書には、欄外に小さい字で書かれているだけです。ただ私はこれは世界史上極めて重要な出来事だったと考えております。

本日は、この提案の経緯から説き起こしたいと存じます。そもそもなぜ日本はこのような提案をするにいたったのか、どのような経緯で否決にいたったのかというその流れについてです。否決されましたが、日本全権は、この提案を成すことで、人種差別の存在に世界数億人の注目を惹きつけるとともに、将来絶対これを変えさせるのだという決意を示しました。

そして、次にパリ講和会議終了後、この問題はどうかになったのかについてお話させていただきます。牧野全権はこの提案の否決が確定する席上、またの機会にこの問題を再提議する権利を留保すると述べています。日本政府は、再提議したのでしょうか。そして、第二次世界大戦を経て、牧野らが激しい抵抗にあつて通すことが出来なかった人種平等は、新しくできた国際連合によってあっさり認められます。その流れをお話しし、続けて、ではそれで人種の問題はかたがついたのか、その後の流れをみてみたいと存じます。戦後の人種差別について世界全体をお話ししたいところですが、ここではいま話題のトランプ大統領の国、アメリカ合衆国の人種問題を中心に今日の第二次トランプ政権までを見ていきたいと存じます。

まず、なぜ一九一九年のパリ講和会議で日本代表が人種差別撤廃提案を提出したのか。

その理由からみていきたいと存じます。それには当時の国際情勢における日本の立場、とくに当時の日本のエリートたちが国際情勢をどのようにみていたのかを考えてみる必要があります。一九一九年と言えば、まだ大正八年です。外交方針を担っていたのは、臨時外交調査会という超党派の機関でした。その主要なメンバーは、首相の原敬は一八五六年生まれ、伊東巳代治と後藤新平は一八五七年生まれ、牧野伸顕は一八六一年生まれなど、参加者の多くは幕末の生まれで、幕末から明治初めにかけて、欧米列強の力が圧倒的で、下手をすると欧米列強によって日本が植民地化されかねないという危機にあったことは彼らの記憶に新しいものでした。力によって結ばされたいわゆる不平等条約を完全に改正できたのは一九一一年、パリ講和会議の時点でまだ十年も経っていませんでした。北米では、日本人移民が人種の故をもって迫害されていました。

そのようななか、パリ講和会議の開催を知った日本の首脳たちの頭を真っ先によぎったのは、このこ極東から出かけていっても、他の主要列強の代表たちは白人ばかり、差別されてまともには相手にされないのではないかと、いうことでした。今日われわれは、日本が米英仏伊日という五大国の一翼を担って堂々とパリ講和会議に参加したことを知って

います。ですが、当時はまだどのような資格で講和会議に参加できるかまったくわかっていなかったのです。

日本政府は、他国の首脳と並んでも大丈夫なように、重みをもたせるために、首相を務めたこともあり、講和会議の議長を務めるクレマンソーとも旧知の西園寺公望を名目上の主席全権に、実際に取り仕切るのは大久保利通の次男で、米国で学び外交官として欧州で勤務した経験や外務大臣の経験もある牧野伸顕を次席全権として派遣することを決めました。

講和会議の方針として、政府から代表団に伝えられた訓令は人種差別に対する憂慮を深く反映するものでした。内田外相から全権の一人となるロンドンの珍田大使にあてた「講和ニ関スル日本政府ノ方針決定ニ付訓令ノ件」という電報の一部を引用します。

国際間ニ於ケル人種的偏見ノ猶未タ全然除
去セラレサル現状ニ顧ミ・・・人種的偏見ヨ
リ生スルコトアルヘキ帝国ノ不利ヲ除去セン
カ為メ事情ノ許ス限り適当ナル保障ノ方法ヲ
講スルニ努ムヘシ

人種差別がいまだに全然なくなっていないので、それが日本にとって不利に働かないようになんとかしろという内容でした。このよう

な、人種差別について「適当ナル保障ノ方法ヲ講スルニ努ムヘシ」という漠然とした訓令のためパリの全権はなにかしなくてはなりません。牧野たちは、新しくつくられようとしている国際連盟の規約に人種差別禁止を盛り込むことでこの訓令に応えることにしました。それには根回しが必要です。国際連盟設立という議題において一番の鍵を握っていたのは、アメリカのウィルソン大統領でした。そもそも国際連盟は、ウィルソンのたつての希望で作られることになった側面が大きかったのです。

牧野はまずウィルソン米大統領に直接働きかけようとしています。しかし、このパリ講和会議ですが、東欧諸国の独立問題や植民地の再配分問題など世界全体のあらゆる出来事にわたっており、そのほとんどにウィルソンは関わっておりなかなか会うことがありません。それでウィルソンが「もう一人の自分」とまで表現した腹心ハウス大佐に打診してみることにしました。

ハウスに面会すると、牧野が拍子抜けしたこと、ハウスは日本の人種差別撤廃提案に理解を示し、ウィルソンからも諒解をとってくれたのでした。これで安心した日本代表でしたが、思わぬ変化が起きます。ウィルソンは実は国内対応のためにパリ講和会議期間中に一月ほどアメリカに一時帰国しています。

一番の目標である国際機関設立に対して、米連邦議会の中に反対が強く見られたため対応を迫られたのです。

大統領が一時帰国からパリに戻ったのち、牧野はハウスに、ウィルソンは相変わらず日本の提案には賛成ですよ、と確認します。それに対してハウスは大丈夫だと思ふよと答えます。この少し他人行儀な以前と異なるトーンを牧野は見逃しませんでした。実際の報告書には次のように書かれています。

大統領ニ於テハ本問題ニ対シ依然曩日ノ態度ヲ継続シ居ルト信スルモ果シテ如何トノ間ニ対シテハ自分ノ承知シ居ル限ニ於テハ何等変更ナシト信スル旨ヲ輕ク答ヘタリ右所感並ニ応答ヲ綜合翫味スル時ハ實際大統領ノ態度ハ帰米後ノ状勢ニ顧慮シ多少ノ変更ヲ来シタルニ非スヤノ疑ナキ能ハス

牧野がするどく見抜いた通り、ウィルソンは日本の提案について心変わりしていたのでした。米西海岸の政治家たちの選挙民は、日系移民の流入に苦しんでおり、人種差別をなくそうという提案は、ウィルソンの母国の人々にとっては許しがたかったのです。

米側の態度が変化したことを悟った牧野は、最後の希望をイギリス全権にかけます。しかし、オーストラリアのヒューズ首相が、日本

の人種差別撤廃提案に絶対反対を唱えていました。白豪主義を唱える母国オーストラリアにおいて総選挙を控えているヒューズはどうしても首を縦に振りません。

日本の提案が採択に近づいたことが二度ありました。一度目は、規約案をつくる最中で、宗教の自由を記した条項に、人種提案も組み込もうと牧野がしたときです。そのときは、ウイルソンに代わって代理で議長を務めていたイギリス人のセシル卿が、条項ごと削除してしまいました。二度目は、最終的に規約案を確定するときでした。フランスとイタリアも賛成に回り、委員全体の投票でも11対5で賛成が過半を得ました。日本の提案は通ったかと思えました。ところがアメリカへの一時帰国から戻って委員会の議長を務めるウイルソンが、重要事項は過半数でなく全会一致でないのだめだと言って不成立と宣言し押し切ってしまったのです。そんなルールはどこにも書かれていないのです。結局のところ、会議を仕切っていたのは米英だったのです。

そもそも当時、パリ講和会議をリードしていた欧米のエリートたちの多くにとっては人種差別的態度は当たり前のことでした。議長を務めるフランスのクレマンソーにしても「この世界にはブロンドの女性がいるというのに、我々はいえここで不細工な日本人と一緒に缶詰にされている」と公然と発言し

ていました。「不細工な日本人」とは牧野らのことです。

人種差別撤廃提案が、国際連盟規約に組み込まれない以上、とるべき道は限られてきます。人種提案を認めないような組織には加わらないとして退席するか、そこは目をつぶって人種案の入っていない規約案に賛成するか。そして国際連盟規約案が総会にかけられるその日を迎えます。

ここで牧野の胸の内に分け入ってみたいと思います。もし、あれだけ主張した人種差別撤廃提案を諦めて、ここで引き下がってしまったら、国際社会に非白人を軽んじる風潮はますます強まり、日本も低く見られてしまう。国際連盟は所詮英米を中心とするアングロサクソンによる現状維持組織であることは明らかだ、ドイツ同様持てざる国日本が入っていても得はない、いっそ、人種平等の主張を高らかに宣言し、椅子を蹴って退席すべきではないか。

しかし、牧野はこうも考えます。いや、ここで退場しては、国際社会のなかで孤立しかねない。折角、五大国の一つとして講和会議に招かれ、国際連盟では常任理事国の席を得た。人種平等と規約には謳われておらずとも、日本国は欧州の中小白人国よりも優遇されている。それに、今後いつでもまた提案を提出することもできるではないか。

それは四月も終わりだというのに午前中には雪もちらついていた寒い日でした。総会は三時から始まりました。会議の冒頭、議長のクレマンソーが牧野を指名し、発言の機会もたらされます。

この時の模様を全権ではなく随員の一人として自由な立場から観察している若者がおりました。西園寺首席全権に個人的に頼んで随員として参加させてもらった若き日の近衛文麿です。彼がその時の模様を書き記しております。一部引用させていただきます。

次に議長は我が牧野男を呼べり・・・満場は固唾を呑んで男の一言一句も聞き洩らさじと許りに傾聴せしが終に男の口より「吾人は此提案が今日此処にてただちに採用せられるべき事を強いて求めざるべし」の語を聞くに及び始めて安堵の胸をさすりし如かりき

こうして米英協調路線を選んだ日本でしたが、果たして人種平等を主張し続けたのでしょうか。牧野が人種平等の主張をやめないと述べたにもかかわらず、日本政府は、第一回国際連盟総会などの絶好の機会と思える場において、人種案を提議することを避けます。英米との国際関係が拗れるのを憂慮した結果でした。そうこうしているうちに満州事変などもあり日本は国際連盟を脱退してしまいま

す。

その後、人種平等提案が国際会議の舞台に現れたのは、第二次世界大戦の後半、米国が主導して新たな国際機関をつくろうとしたときです。それに対して、主要連合国の一つである中国が、国際機関設立に向けた一般原則の一つとして「すべての国家とすべての人種について平等の原則が維持されるものとす」という原則を入れるべきと提案しました。

結局、日本不在のまま、国連憲章の第一条「国際連合の目的は、次のとおりである」の第三節に「人種、性、言語又は宗教による差別なくすべての者のために人権及び基本的自由を尊重するように助長奨励する」と記されました。また、一九四八年十二月の国連の第三回総会において制定された世界人権宣言には、第一条「すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である」、そして第二条「すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、国民的若しくは社会的出身、財産、門地その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別をも受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる」と定められています。パリ講和会議で国際連盟規約に挿入することに、あれだけ英米代表によって抵抗された人種平等をうたう条項ですが、この場ではあっさり

と通過します。しかし、残念ながらその場にも、国連創設時同様に日本代表の姿はありません。いまだに占領下にあったのです。残念ながらと言わねばなりません。

このようにあっさり人種平等が盛り込まれたのには、第二次世界大戦の影響がありました。人種差別というものによって人はどこまで残酷な振る舞いができるのが、ナチスドイツのユダヤ人虐殺を始めとする戦争中の行為によって明らかになったのです。

ただ、その後の人種差別をなくす動きはスムーズに進んだでしょうか。人種差別に関する実態の変化をアメリカを中心に見ていきたいと思います。ウィルソンの出身地である米国南部には深刻な黒人差別が根強く残っていました。

第二次世界大戦において自由と民主主義を守るために命を懸けて戦った黒人兵たちは、ヨーロッパの戦線で人種に関係なく解放軍として現地でヨーロッパの白人に敬意をもって接遇されるというこれまで人生で受けたことのない経験をします。生まれて初めて人間として扱われる経験をしたと言っても良いと思います。

ところがアメリカに帰国すると彼らを待っていたのは厳しい人種差別と隔離政策でした。一步南部に入るとトイレも水飲み場も黒人専用のものを使わなければならない、バスも後ろ

の席、レストランはトイレの前の席でも入れてもらえればましな方で、多くが食事をさせてもらえませんでした。欧州での経験でそれはおかしいと気が付いた黒人は以前のように黙ってはいませんでした。

東西冷戦も後押ししました。ソ連の体制は抑圧的でアメリカは自由平等の国と宣伝していたものの、アフリカの国の大使が乗り換えのために南部の空港に降り立つと、レストランで食事すらできず、侮蔑的な言葉を浴びせかけられます。これでは冷戦において第三世界で味方を増やすどころではありません。また、当時広まりつつあったテレビも重要な役割を果たします。無抵抗な黒人に白人警官が巨大な警察犬をけしかける映像などの、南部の差別の実態を全米のお茶の間に動画で届けたのです。こうして米国内で人種差別をなくそうという公民権運動が盛り上がり、一九六四年には公民権法が成立します。人種差別をなくす動きは少しずつ前進していきました。

この流れは、一九八〇年代以降のポリティカルコレクトネスの強まり、なかでも言語面での差別をなくそうという動きにつながります。三大ネットワークのニュースで、あるメインキャスターが十二月に季節のあいさつとして、「メリークリスマス」というかわりに「ハッピーホリデーズ」と挨拶したのが一九八〇年代半ばのことでした。「メリークリス

マス」と挨拶すると、キリスト教徒以外には失礼だということです。このようにマイノリティに配慮する風潮が広まってきました。

そして二〇〇八年の選挙で、オバマがアフリカ系としてはじめて大統領に当選しました。パリ講和会議で日本の提案を率先して潰しにかかったアメリカは人種差別を克服したかに見えました。

今、そのような流れは、トランプ大統領の登場によって、大きく後退しているように見えます。それまで築き上げて来た、公の場で公人が人種差別的発言をすると一発アウトになるという流れが吹き飛んでしまったのです。一期目に向けた選挙運動で、トランプ候補は「メキシコ人は強姦魔」であるとか、あからさまな人種差別的差別発言を繰り返しましたが、それが投票に影響しませんでした。むしろプラスに働いた側面すら指摘されました。

いったん当選すると、おとなしくなるのではないかと期待する向きはありましたが、そうはなりません。社会に存在する差別意識を鋭い嗅覚で感じ取ったトランプ大統領はますます差別的発言を強めました。黒人差別に抗議してアメリカンフットボールにおいて、黒人選手が国歌斉唱の際に立膝のポーズで差別に抗議すると、「あんなやつは首にしる」と投稿しました。

そのようなトランプを後押ししたのは、

「メリークリスマス」でいいじゃないか、そこまで少数者に気を遣わないといけないのかと不満をため込んでいた人たちでした。トランプの登場以前においては、そんな不満を口にしようものなら差別主義者と見なされると表立って口にすることを控えていたのです。そのような人々は、トランプの振る舞いに「なんだ、言っているんじゃないか」となりました。トランプがお墨付きを与えた形になったのです。

トランプ政権下でICE（連邦移民関税執行局）が取り締まりを強めています。ICEが不法移民としてまず拘束する基準とするのは、アメリカ国籍のあるではなく、どう見えるかだという指摘があります。すなわち、一九二〇年代の移民法で示されたイギリスやドイツ、スカンジナビアの目が青く、肌の白い人が望ましいアメリカ人であるという考えが復活したかのように、米国籍をもっているも、浅黒いラテン系やアジア系の人々は、まず外見で摘発の対象となるのです。

トランプ大統領の登場に伴って頻発する人種差別とも見える現象は、はたしてトランプという特異な人物の登場による一時的なものなのでしょうか、それとも、英米代表によってパリで人種差別撤廃提案が葬り去られて以来、人種差別をなくす努力がなされてきたが、それが一〇〇年経ってまた世界がぐる

りとまわって似たようなところに戻ってきてしまったのでしょうか。トランプ後に、何が残り、何がトランプ固有のものとして次の政権の時代になくなるかを考えつつ対応しているかねばならないと思います。ご清聴ありがとうございました。

◆明大ニュース

●連合駿台会学術賞・学術奨励賞」授賞式

—学術研究の成果を表彰—

第三十一回「連合駿台会学術賞・学術奨励賞」の授賞式が一月二十八日、駿河台キャンパス・アカデミーコモンで行われ、商学部の奈良沙織教授と政治経済学部の廣部泉教授が連合駿台会学術賞を、農学部の金子賢太郎准教授が連合駿台会学術奨励賞を受賞した。

学術賞は、社会科学分野から奈良教授による『業績予想の実証分析—企業行動とアナリストを中心に』が、人文科学分野から廣部教授による『人種差別撤廃提案とパリ講和会議』が受賞した。同奨励賞は、自然科学分野から金子准教授による「視床下部を標的とした新しい肥満や糖尿病の栄養治療戦略に関する研究」が受賞した。

授賞式は、連合駿台会の駿台懇話会で開催され、第一部の学術賞受賞記念講演会では廣部教授が「人種差別撤廃提案とその今日的意味」をテーマに講演した。

続く第二部の授賞式では、上野正雄学長と連合駿台会の田村駿会長から、受賞者に表彰状と記念品、副賞の目録が授与された。その後、受賞者三人が登壇。奈良教授は「明治大学は研究・教育の両面で恵まれた環境。このような場があったから研究を続けてこられた。今後社会に資する研究を進め、教育にも還元していきたい」と謝意を表した。廣部教授は「このような賞が設けられていること自体が、研究を続ける大きな励みになっている」と語った。金子准教授は「本日の受賞を励みに、教育と研究の双方に力を注ぎ、社会に還元できる成果と人材育成につなげていきたい」と今後の教育・研究活動への意欲を語った。

●明治大学発ベンチャー

ポル・メド・テックとシンポジウム共催

異種腎移植に向け最新情報を一般公開

明治大学は二月十五日、駿河台キャンパスで、明治大学発ベンチャーの(株)ポル・メド・テックと公開シンポジウム「異種腎臓移植の臨床応用への期待とそれに伴う社会的課題」を共催し、医療関係者や腎不全患者、その家族、報道関係者など百二十人が参加した。

日本の腎移植はドナー不足により平均待機期間が約十五年となっており、透析治療を続ける患者のQOL向上に向けた選択肢として、異種腎移植に関する動向が注目されている。

異種腎移植は、拒絶反応が出ないよう遺伝子を改変したブタの腎臓を移植する手法。米国のeGenesis社などが臨床応用を進め、二例で二十四週にわたる透析離脱に成功している。

明治大学では、農学部部長の長嶋比呂志教授が設立し、初代所長を務めた明治大学バイオリソース研究国際インスティテュートがドナーブタの製造・育成に関する研究開発を進めてきた。長嶋教授がCEOを務めるポル・メド・テックは、eGenesis社が臨床応用に用いたドナーブタのクローン個体の国内生産に成功しており、日本でも臨床応用が実現する可能性がある。本シンポジウムは、異種腎移植を取り巻く最新の情報を一般公開するため開催された。

第一部では、長嶋教授のほか、マサチューセッツ総合病院で異種腎移植の執刀を行った河合達郎氏（ハーバード大学医学部外科教授）、田邊一成氏（徳洲会湘南鎌倉総合病院腎移植・ロボット手術センター長）、堀田記世彦氏（北海道大学大学院医学研究院准教授）、神里彩子氏（国立成育医療研究センター医事法制研究部長）が講演。遺伝子改変ドナーブタの特徴、米国の先行事例、臓器不足の現状、透析患者のQOL向上への期待、臨床応用を巡る社会的課題などが共有された。第二部の総合討論では、参加者も交えた質疑応答が行われ、臨床応用に向けた現状と論点

について、医療関係者や患者、一般市民が認識を共有する機会となった。

●一般選抜志願者数二年連続で十一万人超

明治大学の二〇二六年度入学試験は、二月二十七日に出願を締め切った大学入学共通テスト利用入学試験（後期日程）など一部を除き、試験日程を終えた。

総合型選抜等を除く一般選抜の志願者数は、二月四日時点で十一万四千六百七十六人となり、二年連続で十一万人を超えた。

明治大学キャンパスと全国六都市（札幌・仙台・名古屋・大阪・広島・福岡）を会場とする「全学部統一入学試験」は二万二千二百九人（前年度比九三・四％）と減少。一方、各学部が実施する「学部別入学試験」は、多くの学部で志願者数が増加し、合計六万三千二百四十六人（前年度比一〇四・〇％）と大幅に伸びた。

「学部別入学試験」のうち、商学部、経営学部、国際日本学部が実施する英語の外部試験を活用した「英語4技能試験活用（利用）方式」は、三学部合計で五千十人（前年度比一四四・九％）に達し、全体の志願者数をけん引した。

また、「大学入学共通テスト利用入学試験（前期日程）」の志願者数は二万九千二百二十一人（前年度比九六・八％）となった。後期

日程は商学部、理工学部（機械工学科を除く）、総合数理学部で実施する。

●OB社長

▽(株)東奥日報社Ⅱ田中徹氏（一九八三年文学部卒・六十四歳）

▽国立大学法人茨城大学Ⅱ佐川泰弘氏（一九九三年・政治経済学研究科博士前期課程修了・六十一歳、四月一日就任予定）

▽日本信号(株)Ⅱ後藤隆一氏（一九八九年経営学部卒・六十一歳、四月一日就任）

▽第一ネオ生命保険(株)（現・ネオファースト生命保険(株)Ⅱ近藤良祐氏（二〇〇三年政経学部卒・四十五歳、四月一日就任）

▽東洋アルミニウム(株)Ⅱ田中勝元氏（一九八七年政経学部卒・六十一歳、四月一日就任）

●二〇二五年度「学生部長賞表彰式」

課外活動で成果を挙げた学生を表彰

課外活動で顕著な成果を挙げた学生をたたえる「学生部長賞表彰式」が十二月十九日、駿河台キャンパス・アカデミーコモンで開催された。これは学業や体育会活動に限らず、多様な課外活動における優れた成果を表彰するもの。今年度は、シルク・ドゥ・ソレイユへの出演や能登半島地震の復興支援など、幅広い分野で活躍した団体・個人十七組が表彰

を受けた。

開会のあいさつに立った石津寿恵学生部長（経営学部教授）は「受賞を励みに、さらに高い目標に挑戦していつてほしい」と受賞者を激励した。続いて受賞者が1組ずつ登壇し、それぞれの活動内容や成果を紹介。その後、石津学生部長と富重与志生副学生部長（文学部教授）から表彰状と副賞が贈呈された。

式典には受賞者の家族も参加。海外からビデオレターで参加する学生や、自身の活動の一端を披露する学生もあり、会場は大いに盛り上がった。

また、学生部長賞表彰に続いて、今年度第二期までの「創立者記念課外活動奨励金受賞者表彰」も行われた。富重副学生部長は奨励金の趣旨を説明した上で、受賞者にエールを送った。最後に、石津学生部長が閉会の言葉を述べ、表彰式は盛会のうちに幕を閉じた。

●公認会計士試験合格者数

大学別ランキングで五年連続三位

二〇二五年公認会計士試験の本学の最終合格者数が八十四人となり、大学別の合格者数ランキングでは五年連続三位となった（明治大学経理研究所調べ）。

金融庁の公認会計士・監査審査会は十一月二十一日、二〇二五年公認会計士試験合格者を発表した。願書提出者総数は二万二千五十

六人、論文式試験の受験者数は四千六百六十五人、合格者数は千六百三十六人、合格率は七・四%だった。

明治大学の合格者八十四人のうち、五十一人は経理研究所室員だった。経理研究所の大倉学所長（経営学部教授）は、「信頼される会計士として、さらに研さんを積んでほしい」と合格者らにエールを送るとともに、「本学出身の会計士で組織されている明治大学公認会計士会の一員として、後に続く明大生たちの指導や支援にも尽力してほしい」と期待を込めた。

★大学別合格者数ランキング

（明治大学経理研究所調べ）

順位	大学名	合格者数
1	慶應義塾大学	177人
2	早稲田大学	149人
3	明治大学	84人
4	中央大学	64人
4	同志社大学	64人
6	立命館大学	55人
7	東京大学	54人
8	京都大学	49人
9	神戸大学	44人
10	一橋大学	41人

※大学院生・修了者を含む集計

●第十二回大学情報サミット大会を開催 —私立六大学の情報システム部門が連携を深化

第十二回大学情報サミット大会が十二月二十三日、駿河台キャンパス・リバティホールで開催された。大学情報サミットは、私立六大学（慶應義塾大学、中央大学、法政大学、明治大学、立教大学、早稲田大学）の情報システム部門が連携と協力を深めることを目的に、二〇〇六年から継続して実施されている取り組み。各大学の情報システム部門担当者をはじめ企業関係者など、二十七大学・二十五社から約二百人が参加した。

開会に当たり、開催校を代表して中別府修研究担当副学長があいさつを行い、大学を取り巻く情報環境の変化や、大学間連携の重要性について述べた。

第一部では、東海大学学長室（情報担当）課長の東永祥氏が、「あなたの大学がランサムウェア攻撃を受けたらどうする？——事例から考える初動対応、組織体制、連携、優先順位」と題して講演を行った。昨年四月に同大学が実際にランサムウェア被害を受けた事例を基に、事案発生直後に求められる迅速かつ的確な初動対応や、学内外の連携体制の構築、組織としての意思決定の重要性などについて、具体的な解説がなされた。

続く第二部では「大学DXと情報セキュリティ

ティ——六大学が語る現在地とこれから」をテーマに、各大学の情報セキュリティに携わる教員らによるパネルディスカッションを実施。大学のDX推進に伴う学内外の課題や、近年増加するサイバー攻撃への対応、今後の情報セキュリティ体制の在り方などについて、活発な意見交換が行われ、大会は盛会のうちに終了した。

明治大学は、今後も情報セキュリティ分野の強化と大学間での連携を通じて、学生が安全・安心に学べる教育・研究環境の整備に継続して取り組んでいく。

●副専攻プログラムが始動

所属学部を越えた学びを後押し

明治大学は二〇二六年四月から、新たに「副専攻プログラム」を導入する。これは全学部・全学年を対象に、所属学部を越えた領域の学びを提供する制度。本学の総合性と多様性を生かし、学生の幅広い学問的視野や問題発見能力、複眼的な思考力を養い、複雑化する社会課題に向き合う力を育むことをねらいとしている。学生は、特定の領域やテーマに沿って編成されたプログラムを通じ、専門分野を軸としつつ「もう一つの軸」となる学びを得られる。

本制度は二〇二六年度の学部在学生から適用される。所属学部以外の副専攻科目の単位

を修得し、各プログラムが定める修了要件（十六単位以上の修得）を満たした学生は、修了認定を受けられる。修了者には修了証が発行される。

二〇二六年度は四つのプログラムを開講予定。

●先端数理科学研究科

スマート電力とスマートグリッド

日台国際ワークショップ

第八回スマート電力とスマートグリッド日台国際ワークショップ（SPE二〇二五）が十二月五日・六日、中野キャンパスで開催された。

本ワークショップは、先端数理科学研究科が大学間協定校である台湾・中原大学との共催により二〇一八年度から実施している取り組み。大学院生が、深層ニューラルネットワークや進化的計算、再生可能エネルギー、アクティブ配電自動化、発電機起動停止計画などの観点から、スマート電力とスマートグリッド分野の新しいテーマで研究発表を行い、意見交換を行うことを目的としている。本学からは先端数理科学研究科ネットワークデザイン専攻・総合数理学部ネットワークデザイン学科の学生五人、理工学研究科電気工学専攻・理工学部電気電子生命学科の学生四人が参加。中原大学からの九人を含め、計十八人

が参加した。

参加学生は五日、東京電力パワーグリッド(株)銀座支社の系統給電指令所と高輪変電所を見学。六日は基調講演などを実施し、中原大学のYing-Yi Hong教授が「マイクログリッド周波数制御のためのベイズ最適化LSTM-MFPCコントローラー」をテーマに講演した。また、研究・知財戦略機構スマートシティ・イノベーション研究所の森啓之客員研究員(元総合数理学部教授)が「電力システムにおける量子進化的計算法の最新の技術動向」と題して講演し、量子進化的計算法の概要と研究動向を紹介した。このほか、量子コンピューティングを考慮した進化的計算法に関する発表などが行われた。

次年度のSPE二〇二六は中原大学で開催される予定。先端数理科学研究科は今後も、学生が研究成果を発表する機会の充実を図る。

●明大トップアスリート百二十九人に

スポーツ奨励奨学金

スポーツで卓越した成績を取めた学生を対象とした「明治大学スポーツ奨励奨学金」の二〇二五年度採用者がこのほど決定し、体育会三十二部・百二十九人に給付された。

この奨学金は、スポーツと学業の両立を促し、本学のスポーツ活動のさらなる活性化を推進することを目的に、体育会運動部に所属

する学生に与えられるもの。優れた競技成績や「文武両道」の実績が採用条件となる。給付額は、授業料年額相当額または授業料年額の二分の一相当額を上限とした金額。

●「完遂」七年ぶり十四度目の大学日本一

第62回全国大学ラグビーフットボール選手権大会

体育会ラグビー部は一月十一日、MUGスタジアム(国立競技場)で行われた第62回全国大学ラグビーフットボール選手権大会の決勝で早稲田大学と対戦し、22―10で勝利。七年ぶり十四度目となる大学日本一に輝いた。試合は、前半9分にペナルティゴールで先制を許したものの、19分に田代大介選手(経営3)がトライを決め、主将・平翔太選手(商4)がコンバージョンゴールを成功させ逆転。33分には、ゴール前ラインアウトから伊藤龍之介選手(商3)が抜け出しトライ、平選手がコンバージョンゴールを成功させ、14―3で前半を折り返した。

後半8分には大川虎拓郎選手(法3)がトライを決め、さらに20分には平選手がペナルティゴールを成功させ、22―3とリードを広げた。その後、32分に早稲田大学にトライとコンバージョンゴールを許したが、集中力を切らすことなく守り切り、ノーサイドを迎えた。

最後まで「前へ」の姿勢で、今年度のチームスローガン「完遂」を見事に体现した。

★今季で勇退する神鳥裕之監督のコメント

素晴らしい環境で素晴らしい相手と戦い、優勝という形で締めくくることができた。部員全員を誇りに思う。大一番の舞台で最高のパフォーマンスを見せてくれた。支えてくださった全ての方に感謝したい。

★主将・平翔太選手のコメント

この一週間、「All connect」をテーマに準備してきた。フィールド外のメンバーやファンの皆さまと一つになって戦えたことが大きかった。また、フィールドの15人全員が、強化してきたディフェンスを80分間体現できたことが勝利につながった。

「連合駿台会ホームページ」のご案内

下記のQRコードから読み取っていただくことで、直接アクセスが可能です





経済、法曹、文化など各界でご活躍の明治大学OB・OG諸氏よ！ 来たれ！「連合駿台会へ！」

「連合駿台会」は、1953年に設立された「茗水クラブ」と、1964年に設立された「明友クラブ」が2002年に統合して設立された歴史と伝統のあるOB・OG組織です。

1月22日、駿河台キャンパス・アカデミーコモンにて、第30回連合駿台会学術賞・学術奨励賞の記念講演および授賞式と、「明治大学と連合駿台会が相互の情報交換を図り、母校の教育振興と地域社会の発展に寄与する」事を目的とする駿台懇話会が開催されました。

記念講演では、学術賞を受賞された情報コミュニケーション学部清水晶紀准教授に「[時の裁量] 理論と情

ミ学部的法学研究」というテーマでお話いただきました。

また、授賞式では上野正雄学長より表彰状、田村駿会長より記念品の授与が行われ、懇話会では柳谷孝理事長よりごあいさつをいただきました。

連合駿台会は、話題の講師による講演が大人気です。ぜひ、楽しい例会に参加しませんか。



連合駿台会学術奨励賞授与の様子

~~~~~ 各界で活躍されておられる明治大学校友のご入会を歓迎いたします ~~~~~

資料のご請求はこちらまで

**連合駿台会事務局**

TEL: 03-3296-4747 FAX: 03-3296-4748 HP: <https://www.rengosundaikai.jp>  
Email: [rengosundaikai@silkc.ocn.ne.jp](mailto:rengosundaikai@silkc.ocn.ne.jp)

★明治大学広報(3月1日号)に掲載された大学への支援広告。今後も2ヵ月に1回掲載していく予定です。

### ◆駿台トピックス

#### ●昨年(2017年)に続き新入会員歓迎会を開催

例会だけではなかなか交流の機会も限られてしまうため、新入会員を集めて懇親を深めることを目的とした「新入会員歓迎会」。昨年五年ぶりに再開されましたが、今年は三月五日午後六時から、過去二年以内に入会された方のうち十二人の参加者を得て、紫紺館で開催されました。まず、田村駿会長が、「五年後に創立二五〇周年を迎える明治大学のネットワーク構築のためにも、会の活動にさらなるご理解を願いたい」と歓迎の挨拶を行い、引き続き鈴木隆志専務理事、また運営委員会メンバーの各委員長がそれぞれの活動現況などを報告、協力をお願いしました。

その後、田村会長の乾杯の挨拶で始まった懇親会では、名刺交換などで親しく交歓した後、十二人の新入会員が、自己紹介も兼ねて母校への思い出や仕事の話まで、持ち味たっぷりのスピーチを披露してくださいました。今回は人数が少なめでしたが、その分、ゆっくり懇親を深めることができました。

当日の参加者は以下の方々です。

〈新入会員〉石松喜典、大下哲哉、栗田大輔、小林伸弘、田中彰一、田母神博文、椿宜和、長尾睦子、中田泰彰、野田康平、鼻戸勝紀、藤井雅則



〈連合駿台会関係者〉田村駿、鈴木隆志、大野正美、高澤徹、齋藤柳光、眞壁八郎、馬場範夫、室井恵明、鬼塚和也、阿部倫明、村山友彦、矢嶋まゆ子

## ◆駿台懇話会出席者

## ○明治大学「招待者」

柳谷孝、上野正雄、岸上謙司、竹本田持、小西徳應、須田努、矢ヶ崎淳子、山田浩哉、出見世信之、藤江昌嗣、増子眞也、石津寿恵、中別府修、黒澤睦、乾孝治、山村能郎、高浜光信、小野島真、竹中麻子、阿部力也、荒川薫、広沢絵里子、歌代豊、伊藤直樹、小瀬川郷子、酒井文彦、長谷川滋、河野理、堀内健、鈴木博之、小野寺幸子、渡佳和、竹内亮、奈良沙織、廣部泉、金子賢太郎、前田更子、村上周一郎、井田正道  
(敬称略)

## ○会員出席者

青木俊雄、青柳勝榮、秋谷勝俊、浅井宏、安達明正、阿部倫明、荒井幸雄、安藤正浩、池田一義、石松喜典、市川亨、伊東正博、伊原敏雄、今村健、岩田守弘、梅野修、榎本知佐、太田良治、大野正美、大前実之、大村託現、岡田誠司、奥山弘幸、鬼塚和也、風間淳、同ご同伴、片倉正美、金山貴博、狩野省市、栢森靖、河村博、木村健一、久保田優子、栗田大輔、栗原権右衛門、黒崎昭男、児玉圭司、同ご同伴、小濱雅説、小林伸弘、小松健、小山修、小山有彦、根田哲雄、根田吉雄、齊藤柳光、酒井喜壽、坂田英夫、坂本道昭、佐藤仁、佐藤宏之、佐野公哉、澤野太嘉嗣、鈴木

章浩、鈴木一巳、鈴木隆志、関口勝裕、関根均、園部洋士、高岡香、高澤徹、高橋郁夫、田口幸隆、田村駿、田村健、田母神博文、樽見俊之、当山明彦、戸田琢哉、富水流孝二、永井伸彦、中川敏洋、中野祥宏、中村豊、西澤豊、沼田裕紀、野儀健太郎、橋本元、長谷川進一、畠中君代、幡谷公朗、鼻戸勝紀、同

ご同伴、原宏、深代尚夫、同ご同伴、福田和彦、古本英樹、眞家裕介、眞壁八郎、向井眞一、村岡健、森一朗、安田信幸、山口大介、山口政廣、山口又宏、山田晃久、山田朝彦、山田幸夫、弓野理恵、吉田菊次郎、渡邊建三、渡邊容子

## 【編集後記】

明治大学広報が来年三月発行の第819号で終了する。一九七二年九月創刊、半世紀を超えて愛する母校の今を伝え続けてくれた。その役割はすでに学内外で人気サイトとなっている「Meiji NOW」などにバトンタッチされつつある。言わずもがな、時代の要請だ。十年以上編集委員を務めてきた。懐旧の念はなくなすが、むしろ大いにエールを送りたい。デジタルの訴求力は紙より絶大だ。わけてもスピードと量は比べるべくもない。今や我が母校の一大ネットワークは六十一万人超の校友を軸に世界に羽ばたきあらゆるシーンで活躍する。発行部数は年初一月号と九月校友号では三十六万部にもなる。紙ではとても対応しきれない。とはいえ、アンチデジタル派も少なくはない。そのため年二回の後続紙を発行する予定だという。終了一年を前にした会議では「紙からデジタルへ、どう切り替えていけばいいのかを懇切丁寧にガイダンスを」とお願いした。

思えば、駿台会報も本紙で377号となる。明

治大学広報より十年も先んじて創刊されており、設立七十三年の歴史を刻む卒業生団体の雄たるわが会の広報を支えてきた。けっして容易ではなかったことだろう。継続は力。関わってこられた先輩諸氏や事務局のご尽力に敬意を表したい。もちろん、わが会にしても時代の要請には抗しがたい。このところホームページなどの併用をお願いしているのもそのためである。

そんな流れの中でも、「会報もいい」というお声をいただくことも少なくない。例会の会務報告や講演のダイジェスト、さらには大学情報から参加者のご氏名まできめ細かくご報告する紙ならではの温もりを感じるからだろう。母校・明治大学の絆を重んじる会員の皆さまが、こういうご時世だからこそ、かけがえない人と人のつながりを求めて忙中閑で活動の輪に加わってください。だからこそ、間もなく開設するホームページの会員専用ページにも会報バックナンバーを入れる。紙とデジタルの二刀流。ご愛読賜りたい。

(齋藤柳光)